



「千南原にさんらんと」

小泉 保 (16回)

私は昭和14年(1939)に志志中学校に入学しました。その年から戦争が深刻化し、制服がカーキ色の国防色になりました。しかし、中学生になって嬉しいことが3つありました。第1に腕時計を買ってもらったこと、第2に革の短靴をはいて通学すること、第3に英語が勉強できることでした。

その頃5年制の中学生は、襟にI-Vのイニシアルをつけていて、1年で学年が上の上級生に対しては、先に学年の敬称をしなければならず、中学生同士がすれ違うときにはいつも緊張したものでした。



「勇気と命と夢」

広瀬 寿武 (28回)

パスで様々なボランティア活動を繰り広げる広瀬寿武さんは、知人の紹介で、聴覚障害を持つラリー・ドライバーの筆記通信士としてのサポート役に挑戦することになった。そのドライバーとは、ベテランの国際ラリースト、福沢曜子さんだ。

ダリに挟まれた紙に「お疲れ様」と書いたのを見て、親指を立てて「ニコ」と笑う。今日一日の秒刻みの緊張から開放された瞬間の女性の微笑みだ。小柄な彼女の体が反射的に、敏感な作業を開始したメカに向かう。



「GOOD OLD DAYS」

増田 幸央 (32回)

かつて藤枝東高在学当時、英語で言う「GOOD OLD DAYS」(古きよき時代)という言葉がびびりだせないかと思う出来事がありました。

それは昭和33年秋の体育祭翌日に起きた「事件」です。私を含め10数人が第1時間の英語の授業を集団で欠席せざるを得ない事態になりました。理由は簡単。体育祭のキャンプ・ファイアで盛り上がり、その勢いで同じクラスの赤根君の焼津の家へ仲間でおしゃべり中、ドロンちゃん騒ぎをしたことまでは問題なかったのですが、体育祭の疲れも重なり全員が翌朝、寝坊してしまいました。

特別寄稿

その音韻と形態の構造」という論文に感服し、それを翻訳して北欧出版社から刊行しました。この訳書に著者のE. イトウコネン教授に送ったところ、先生がたいへん喜ばれ私をヘルシンキ大学の日本語講座として招いて下さいました。こうして、私は東京オリンピックの年(1964)、ヘルシンキ大学で優れた教授陣からフィンランド語とウラル語を本格的に勉強することができました。

スビード技術を指示する。彼の指示一つで死の危険すら起こりうる重要な役だ。そのポールの彼女が初めて顔を合わせたのは、ほんの数日前のこと。ポール、恐ろしいのは、何かの...

いた際、同窓会報に投稿しろと命じられた、高校時代のことを含めて、自らの足跡をたどつてみようというつもりになりました。三菱商事は伝統的にエネルギービジネスに深く関与し実績をあげてきた企業ですが、私は最初「石油の石油取引」にその後は米国の2度往たり通算して10年余、駐在米国で2度往たり通算して10年余、駐在米国の国際石油資本と、いわゆるメジャーの取引に国際石油会社海外、国内のエネルギー関係全般の仕事に携わり、といものでした。

随想 東高と私

恩師寄稿



藤枝東高に勤めたころ



萩原 昌明

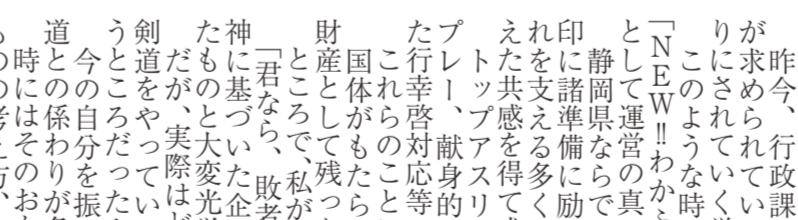
私は、藤枝東高に教師として三年間、校長として三年間勤務しました。教員としても長い期間をここで過ごして二年間勤務しました。教員としても長い期間をここで過ごして二年間勤務しました。教員としても長い期間をここで過ごして二年間勤務しました。



「明治大学総監督という立場で 東高時代を振り返って」

井澤 千秋 (40回)

私は現在、明治大学サッカー部の総監督をして、また井澤千秋と申します。私は東高時代に三冠王を獲得した時のメンバーです。その時の同級生は11名です。元ジュビロ磐田監督の新藤晋元、元早稲田大学監督の松永隆君と現役後もサッカーに携り、後輩の指導に頑張った仲間は2名です。11人は今も皆健在で名古屋に居た大畑貞治君、東京に居る布施隆司君、地元で「たろ吉」を開業した高橋雅美君と1年に1回は「三冠王」を開催「ゴルフ」を愛用しています。



「私の原点、東高時代の剣道」

北村 正平 (38回)

私は現在、静岡県庁に身を置いて行政に携わっている。昨今、行政課題が複雑化、広域化し、かつ、これの迅速な対応が求められている中、今まさに、「地方の力」が試され、敗者は置き去りにされていく時代を迎えていることを実感している。



「没頭の時代」 別所 哲也 (57回)

ボールばかり追いかけていた高校時代。と言っても僕の場合は、サッカーボールではなくバレーボール。東高バレーボール部は僕らの青春時代のものであった。中学時代から始めたバレーボール。中3で183cmもあつたヒョロヒョロ駄目なような僕が、カラダを生かせるスポーツはバレーボール以外見たらなかつた。それに父親も東高時代にあつたバレーボールからその足跡を追いかける。いまもそんなバレーボールを大学までさせてくれた今、両親と支えてくれた8人の兄弟に感謝しています。



「木炭紙の中に 自分を探し続けた青春」

大塚 亮治 (36回)

「高校時代」、それは私にとって虚無、厭世、自己嫌悪などが頭の中に渦巻き、生きていくことが辛く思われ続けた中学時代の次にあった。そんな苦しい自分を彼に向け、苦みを与え、自らを命を絶て、それはそれで受け入れられることになりました。どちらもならずとも自分を抱え、高校時代に入った。

「生徒の皆さんへ」

池谷 裕二 (62回)

この度は、私にとって誇るべき母校である藤枝高校に向けてこのような文章を書かせていただく機会をいただきました。大変光栄に思います。高校卒業の年、第一希望であった東京大学に合格したのは一九九九年のことです。当時一八歳だった私も今年、夏で三六歳になりました。過ち、これからの人生、半分以上を藤枝で、後半を東京で過ごしたことにあります。振り返ると、これだけ長く藤枝を離れていても、性格や性質を含めた自分自身で大切な部分は藤枝で、それも高校時代に育まれたものであることが分ります。私は脳科学に携わっています。大脳生理学という学問です。毎日、脳と向き合っているからこそ「感じ」があります。それは、脳の性能が合っているからこそ「感じ」していることです。もう一歩、歳をとってからも能力は伸びるので、しかし、伸びるための「マージン(余白)やキャパシティ(器の大きさ)」は若い時代に培われます。

高校のころ私は、大学受験に備えかねる勉強をしました。相当努力をしたという自負があります。残念ながらそれでもなお、「もっと勉強しておくといい」という後悔が残っています。あの時に伸ばさなければ、勉強癖ももっと伸びはしたが、今は後悔して反省していません。勉強癖もいる、いる高校生みんなには、後には「欲して」であり、どこで理系人間である私に皆さんに強調したいことがあります。どんな道でも一〇年やってみなければわからないと信じています。大学に入ったのに四年で終わってしまうのもつらいことですが、とりわけ理系の学生でしたら、ぜひ大学院にも進学して、さらに数年は大学院を突き進んで欲しいと思います。特に日本は全国でもとりわけ恵まれて大学環境を持っています。講師陣や研究環境も素晴らしいです。日本の教育費が私よりも多く充てられているのも事実です。つまり、同じ学費で私よりもはるかに多くの学生が伸びるのかもしれませんが、お得意な道を、過度な受験競争で東大受験をあきらめた人にも期がすぎます。意外と知られていないようですが、東大の大学院(修士課程)と博士課程があります。入るには大変な試験はありますが、何年か後に後輩の皆さんが目を見届けて、この大学院にやってくる日も楽しみにしています。世界に開かれた最新鋭の研究現場で興奮の毎日皆さんを待っています。映画公式サイト: www.filmvoice.com 映画公式サイト: www.shotshort.org